

和辻哲郎の「情死」理解について

お茶の水女子大学院生

荒木 夏乃

本発表は、和辻哲郎（1889～1960）の恋愛観に関する研究の一環として、彼の「情死」に対する理解を把握することを目的とする。

和辻は、日本における倫理思想を体系化した思想家である。しかし、彼の整然とした倫理学において、「恋愛」がしばしばその秩序の枠に収まらないことや、また収まらないにも関わらず追究が十分になされていないことは、木村純二によって既に指摘されたところである。木村は、年代順に和辻の作品（『日本古代文化』『日本精神史研究』『風土』『倫理学』）を取り上げ、そこに見られる恋愛観を再考したⁱ。そして、和辻が「男女の理念的な合一」を、「家を捨て、国を捨て、ついに現世を捨てる」ような「運命」をとともにすることによって現われ出で、「情死」に行き着くものと理解していた点に注目した。

木村によれば、和辻は『日本精神史研究』において、「情死」の彼方に「死後の世界」における救済を構想していた。しかし、『風土』ではその考えが見られなくなり、「恋愛的合一の現世的意義」を示そうとするようになった。ただし『風土』においては、「日本的恋愛」の特性は、肉体的生命を惜しまない「勇敢」や恬淡な「あきらめ」として論じられているため、「和辻の説く心身合一の恋愛の理念」は、「死に極まってゆくような非日常的「瞬間」に捉えられるものであって、そこから何らかの日常的行為を導き得るようなものではなかった」と考えられる。このように和辻は、「恋愛」における心身の合一」を集中的に論じてきたため、『倫理学』で夫婦の道徳を説く際に、男女の役割分担というような、現代のわれわれから見ると、やや保守的ともいえる婚姻制度を追認することしかできなかった。

木村は以上の考察に、われわれは和辻の限界ではなく、「和辻の試みた「恋愛」に関する思索の可能性を掘り下げた上で、その成否や功罪を見定めてゆくべき」である、と言葉を添えている。これを受けて本発表は、「情死」（心中も含む）に関する和辻の著作を年代順に辿ることにより、彼の恋愛観がその倫理学にどのような作用をもたらしたのかを考えていく。その際、木村が取り上げなかった和辻の著作にも注目する。具体的には、「一校『校友会雑誌』前号（177号）批評」や「死骸」、『古寺巡礼』『日本古代文化』『日本精神史研究』『風土—人間学的考察』『倫理学』、そして『日本芸術史研究 第一巻—歌舞伎と操浄瑠璃』である。

これらを検討していくと、和辻倫理学における「肉体」の重要性が際立ってくる。これは、例えば恋愛を重視し浪漫主義といわれた北村透谷（1868—1894）にはない特徴であり、和辻倫理学の独自性を再考するためのキーワードになると考えられる。

ⁱ 木村純二「和辻哲郎における「恋愛」概念の葛藤について」『東北哲学会年報』28、東北哲学会：仙台、2012年